

研究報告：Still Moving 2017

『Far Away/So Close: 距離へのパトス』

京都市立芸術大学美術学部構想設計

“Far Away/So Close :The Socialism of Distance”

Kyoto City University of Arts Faculty of Arts Concept and Media Planning

Satoru Takahashi 高橋 悟



図-1

【はじめに】

崇仁学区への大学移転を控え、改めて芸術と大学と地域  
の関係を考察するプログラムとして立ち上げた Still  
Moving も三年目を迎える事になった。今回のテーマは  
『Far Away/So Close: 距離へのパトス』とした。「近くて  
遠い、遠くて近い」という「感じ方」は、物理的な「距  
離」ではなく、共同体と共同体、またそれに属する人と  
人がおかれた地域・環境・歴史・常識など、与えられた

条件によって影響される。継続している Still Moving は、  
そのような「個々の人間の条件」を一旦括弧に入れて客  
体化すると同時に、はずしてみる実験である。(地域や住  
民という条件と地球市民という条件が並列化されるよう  
なイメージ)「距離へのパトス」という日本語をつけた  
のは、「人間の条件」の差異から生じる距離の感情を再構  
築するという印象をつけたと考えたからである。本稿  
では、主に筆者が関わったアナ☆ボルを軸に報告をする。

## 【1】「アナ☆ボル」

(元崇仁小学校北館1階の更衣室 2017年9月23～11月5日)  
「黒き大地をやぶりにてぬ」というコトバから崇仁小学校の校歌は始まる。そこには子供たちへ受け渡すべき歴史への思いが込められているのだろうか。2023年の京都市立芸術大学の移転先となった校舎は、今から3年後には取り壊される。今回のアナ☆ボルの試みは、「制度の時間」から外れた先行移転である。それはまた同時に、管理の網の目から、大地を解放する無目的な運動でもある。その為、期限をもうけず可能な限り作業を続ける事を重視している。まず放置された更衣室の床面にアナを穿ち大地に向けて手作業でゆっくりと掘り進む事からスタートした。このようなフルマイを私達は「アナーキテクチャー」と呼んでみた。それは安全な更地の上に立ち上がる建築への「対位法」となるだろう。

プロジェクトメンバーは、倉智敬子（美術家）、杉山雅之（美術家）、高橋悟（美術家）、畑中英二（考古学者）の4名からなり、開催期間中には下記のイベントを行った。

### ☆考古学フィールドツアー＋レクチャー

9月23日（土・祝）15時～17時

講師：畑中英二（陶磁史・考古学 / 京都市立芸術大学美術学部准教授）

穴掘り作業から出土した陶片、地層についての説明に加え、平安時代から変化し続けてきた鴨川の河原の歴史的背景を知ること、地域の表層とは異なる垂直に連なる堆積された時間という視点を得ることが出来た。



図-2

### ☆土練り鍾馗人形ワークショップ

2017年9月30日（土）13時～15時

講師：畑中英二（陶磁史・考古学 / 京都市立芸術大学美術学部准教授）

講師：倉智敬子（美術家 / 京都市立芸術大学美術学部非常

勤講師）

講師：高橋悟（美術家 / 京都市立芸術大学美術学部教授）  
崇仁から出土した黒い粘土から着想を得て、識字教育に参加されている地域住民の方々を対象に、家の守り神である鍾馗人形を作成するワークショップを開催した。



図-3

### ☆展示「キコエナイヲキク」

2017年10月9日（日）～11月5日（日）

倉智敬子（美術家 / 京都市立芸術大学美術学部非常勤講師）

穴にまつわる寓意的空間はキャロルからカフカまで多様なファンタズムの拡がりをもっている。「いまここ」にありながら何処にもない、「キコエナイ」を「キク」という姿勢とその作法へと誘導する展示となった。

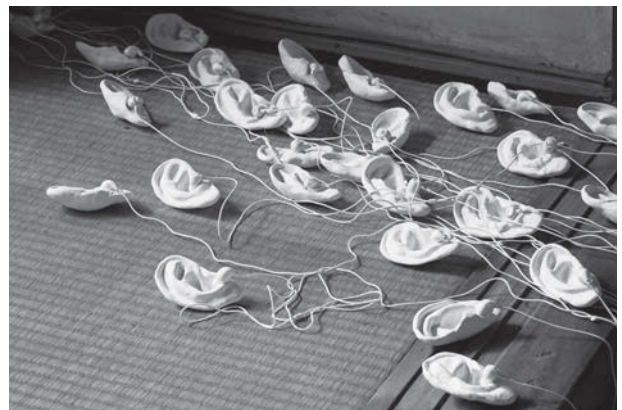


図-4

### ☆アナボル体験からおけ

2017年11月4日（土）・11月5日（日）13時30分～15時

PD 高橋悟（美術家 / 京都市立芸術大学美術学部教授）  
出演：大井卓也（声楽家）、ガブリエル・バロンタン（サウンドアーティスト）

パフォーマーは穴の底まで降り、観客はその様子を見下ろす。アナの底から見える世界には、アナの上から見えるそれとは「異なる距離：パトス」があるが、地の底か

ら響きわたるコトバにならない声は、日常の安定した視覚を不安定に打ち震わせることになった。



図-5

## 【Ⅱ】 Re-Play/ 未完の記譜法

今回の Still Moving は、東アジア文化都市 2017 京都「アジア回廊」との特別連携企画でもあった。観光客が集う二条城と京都芸術センターを結ぶ東西軸が、東アジア文化都市企画の主軸となったが、それらとは異質な視点を設定する為に、元崇仁小学校の体育館を使用し、南北の軸を形成する事を試みた。京都芸術センターでは初の試みとして運動場の展示使用を許可し、日独仏の若手建築家による「かげろう集落」展（2017年8月26日-9月3日）が、7日間の期間のみ開催された。展示物は、期間終了後は廃棄される予定であったが、Still Moving ではそれらを元崇仁小学校の体育館へ移設し「集団の身体相互行為を誘発する実験装置」として捉え直す企画へと転位させた。それは京都市内の明倫学区から崇仁学区への南北の移動が、ヒトのフルマイ自体をどのように変更させる

かを検証する実験ともなった。また映画制作ワークショップ「トポグラフィックシネマ x シネマチティックボディー」10月29日：講師：石橋義正（京都市立芸術大学准教授）立川普輔（京都市立芸術大学非常勤講師）小西小太郎（京都市立芸術大学非常勤講師）を開催し、芸術センターから移動させた建築が多様な表情で見えるような演出をおこなった。照明、スモーク、音響に加えて、小型ドローンや OSMO など複数のカメラを使用し、そこからの多角的視点をライブ映像でスクリーンに投影したもので、ダンサーなどの身体行為を見せるのではなく、参加者がカメラをもって移動することで、かれらの視点と身体の移動そのものが、パフォーマンスともなるという実験となった。



図-6

Re-Play/ 未完の記譜法で使用された構造体は、その後、京都芸大の学生会館ホールへとさらなる移動を重ね「集団のアホーダンス」（アートミーツケア学会：12月15日～17日）へと展開する事となった。

